

宗教と戦争（その3）

大森 海太

五世紀西ローマ帝国滅亡後、東ローマ皇帝によるコンスタンティノーブル総主教と、ペテロの後継者をもって任ずるローマ教皇の対立が進んで神学論争に発展し、十一世紀には互いに相手を破門する東西教会大分裂となった。

その後西欧キリスト教徒のなかでは、ウィクリフやフスによる教皇庁批判が高まり、十六世紀ルターやカルヴァンたちの宗教改革となった。

ハプスブルク家のもとでは、諸侯がカトリックとプロテスタントに分かれて三十年戦争に突入し、これにスウェーデンやフランスが介入して宗教戦争から泥沼の覇権戦争と化して荒廃し、ドイツ帝国が立ち上がるまで二百年以上を要した。

とは言うもののヨーロッパ諸国では、絶対王政から市民革命を経て政教分離の近代国家が生まれ、二十世紀に入って二度の世界大戦も宗教上の対立とは関連が薄い（例外はユーゴ解体後の民族紛争が絡んだバルカン戦争）。

イスラムの世界では七世紀末シーア派が分かれて本流のウマイヤ朝、アッバース朝（スンニ派）と対立し今日に至る。他方ギリシャ、ローマの文献をアラビア語に翻訳し、医学、天文学、錬金術その他文化、学問、技術などで高い水準に達し、他宗教に対してはオスマン帝国まで比較的寛容であった。

一方他者への聖戦を訴える過激なイスラム原理主義の起源は十四世紀前半とされるが、世界的に注目を浴びるのは二十世紀も後半になってからである。

二十一世紀に入って同時多発テロ、IS、タリバンのほか西アフリカの動向などは、貧困や反米（反仏）感情にも結びついているようだ。「イスラムの教え」にもとづくと称する彼らの思想は他の世界との妥協を拒み、女性に対する扱いなどペンクラブのO氏が提起されるジェンダーのテーマとは程遠いものがある。

以上大雑把に言う一神教のなかでも、キリスト教の世界では政治と宗教が分離されたが、ユダヤ教とイスラム教では依然として結びつきが強い。これについて、また一神教以外との関連についてどう考えるか、次回にまとめたい。